

親が子を思う気持ち



拉致された横田めぐみさんの母・早紀江さん(80)と、トシ江さんが親しかったことから2002年に発足した。

「めぐみさんが帰ってくる、その瞬間に立ち会いたい」

北朝鮮による拉致被害者と家族らを支援する「救う会・群馬 群馬ボランティアの会」を取材した。代表の大野トシ江さん(83)、事務局長の敏雄さん(80)夫妻の言葉が胸に残る。会は、13歳で

大野さん夫妻の自宅のリビングには、たぐさんの写真が飾られている。

その中に、笑顔がすてきな少女の姿がある。「背が高く、きれいな子だったのよ」。16歳で亡くなった娘だと、トシ江さんが教えてくれた。約14年間、大野さん夫妻は会の運営を担い、横

田さん夫妻を支えてきた。「親しかった」という理由だけではないはずだ。親が子を思う気持ちは、何をてんびんに掛けようと、釣り合うはずがない。両夫妻は、「まな娘」がいない空白の時間を埋めるように、思いを重ね合わせながら歩んできたのだろう。

普段の報道で取り上げるのは被害者家族が多い。だが、支える人たちにも様々な思いがある。「その瞬間」が来る日信じて、しっかり伝えていきたい。

(白石裕真)